

---

# 魔法使いになりたいから

椰子カナタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法使いになりたいから

### 【Nコード】

N5097Z

### 【作者名】

椰子カナタ

### 【あらすじ】

アンティークショップ『螺旋の環』。ここに住む高校三年生、風代朔羅は、転校生・鞘上絹枝と出会う。共に『螺旋の環』で暮らす事になった彼女たちの織り成す現代ファンタジー。『IRIS / RAGNAROK』のスピノフ外伝。pixivで連載中の作品を随時転載中です。

## プロローグ

身体が熱い。

片目がズキリと痛む。

痛めば痛むほど、体は焼けるように熱を帯びていく。

地下通路を歩く彼女の足取りは酷く重かった。身体を引きずるように、壁に肩を預けながら懸命に歩き続けている。痛みに顔をしかめ、息を切らせながら歩く。

それもその筈だ。彼女の着ている衣服は既にぼろぼろで、それどころか全身が傷だらけであった。幸い出血量は少ないようだが、それでも傷口から流れる血が、彼女の歩いてきた道の上に間を置きながらも落ちていく。

もう体力も限界を迎えていた。それでも歩き続けるのは一体何の為だったろうか。朦朧とする意識の中ではそれすらおぼろげだった。身体が熱い。

片目の痛みは増していく。ズキリと響く鼓動のような痛みは、やがてキリキリと鍼か何かで抉られるような痛みに変わっていく。

ここまで痛むのは彼女にとっても初めての経験だった。痛むのもはや目だけでは済まない。彼女の中に流れ込んでくる暴力的な何かが彼女の心を痛めつけていく。

その目は、そういう類の代物だった。

「ッ！！」

声にならない悲鳴を上げて彼女は蹲るようにその場に倒れ込んでしまった。

誰もいない。昏い地下通路に彼女以外の姿はない。彼女を救助できるような者はどこにもいなかった。

だが彼女にはもう、立ち上がるだけの力は残されていない。痛みの中、彼女の意識は薄れていく。

私、死ぬの、かな。

だが忽然として、彼女の前に現れた人影があつた。もはや衰弱しきつた彼女がそれに気付いたかどうかは定かではないが、その人影はまるで彼女がこんな状態になるまで登場を控えていたかのようなタイミングで現れた。

彼女を見下ろす人影の表情は窺い知れない。口を開いて呟いたのはたつたの一言だつた。

「死なせはしないさ」

その声は彼女に聞こえたかどうか。

意識を失う間際、最後に思い浮かべたのはたつたひとりの妹の姿だつた。

## 第一話 転校生は同居人

1 .

「ほら、行くわよ朔羅」

アンティークショップの看板を掲げた『螺旋の環』店内には、所狭しと骨董品が並べられている。

鏡や置物、果ては屏風などといったラインナップは古今東西の骨董品を網羅していると言つていいだろう。この四月に高校三年生になったばかりの風代朔羅には、それらがどれだけの値打ち物なのかさっぱり分からないのだが。

「それじゃ、行ってくるね。みゆう」

店の奥に鎮座するカウンターの上に、一匹の黒猫が寝転がっていた。みゆう、というのは彼の名前だ。朔羅が名付けた。飼い主である筈の『螺旋の環』オーナー、柊蘭が好きに呼ぶといいと言ったので、その鳴き声からとったのだ。

みゆうの頭を撫でて、朔羅は骨董品の間を縫うように入口へ向かう。ドアの前で彼女を待っていた穂叢なぎさは、朔羅が隣に並ぶと彼女と共に店を後にした。ドアを閉めると、吊り下げ型の看板が揺れる。

『螺旋の環』。古風な造りの洋館はそれそのものがアンティークのようで、この辺りではちよつとした名物になっている建物だ。朔羅となぎさにとっては幼い頃から暮らしている家でもある。彼女らに既に親はない。ここの前オーナーであった赤羽サツキによって拾われ、彼女を親代わりに育ててきたのだ。

お陰で朔羅となぎさ、二人は姉妹のように仲がいい。同い年で、今も同じ高校に通う二人は共に生徒会の役員を務めているなど一緒にいる時間は長い。

こうして登校を共にするのも毎朝の事だ。時に日直などの用事で

どちらかが早めに家を出る事もあるが、そういった例外を除けばいつもと変わらぬ登校風景がそこにあった。

「転校生ってどんな子かな？ 楽しみだよ」

「朔羅は隣の席よね。ちゃんと仲良くしなさいよ」

「む、分かってますよーだ」

今日は彼女たちのクラスに転校生がやってくると聞いていた。分かってるのは女子生徒であることと朔羅の隣の席になる事だけだった。先日転校生の為の机を用意するのを手伝った朔羅は、新しい出会いを待ちきれない様子である。

「あ、あれ水輝君じゃない？」

朔羅は数十メートル先の交差点で、信号待ちをしている一人の男子生徒を見つけた。彼女らと同じ学校の制服に身を包んだ彼の容姿は遠目に見てもとても目立つものであった。日本人らしからぬ金髪に碧眼、肌は白く、顔立ちも日本人離れている。月島水輝。日本人とフランス人のハーフである彼は、朔羅たちの一学年下に当たる後輩で、同じ生徒会役員でもある。

「水輝くん！」

「朔羅、危ないわよ。……もう」

水輝に向けて手を振って駆け出した朔羅に、なぎさは後ろから注意を促すも聞き入れられる事はなかった。いつもの事なので諦めるのも早い。

なぎさが制止をかけたのはもちろん、朔羅の気質故だ。案の定、朔羅は途中で何かに躓いて体勢を崩す。

「わわちよっ」

その場に倒れかかったところで、間髪誰かがその手を取った。朔羅の対面から歩いてきていた通行人の男性だった。短髪に凜々しい顔立ち、銜え煙草をしたスーツ姿の男だ。歳は三十半ばから後半といったところだろうか。

男性は顔を上げた朔羅に、どこか不敵な笑みを投げる。

「大丈夫かい、お嬢ちゃん。足元には気を付けた方がいいぜ」

「あ、は、はい。ありがとうございます！」

「よし、いい子だ。ほら、ちゃんとお姉ちゃんに学校まで送ってもらうんだぞ」

歩み寄り、頭を下げたなぎさに朔羅を預け、男性は去っていった。煙草のフレーバーの匂いが離れていく。

「おはようございます、風代先輩、穂叢先輩」

朔羅たちに気付いた水輝が、こちらへ道を戻ってきていた。なぎさは挨拶を返したものの、朔羅は俯いたまま動かない。

「風代先輩？」

水輝が声をかけると、朔羅は大きく腕を広げて声を上げた。

「私、高校生だもん！」

2 .

「転校生を紹介する。鞘上絹枝だ。君たちと席を共にするのはあと一年だけだが、よろしく頼む」

三年四組担任、雀ヶ森香歩は教卓の傍らに佇む転校生に自己紹介を促した。転校生は黒板に自身の名前を書く。控えめな大きさでそれを書き終えると、彼女はゆっくりと振り返った。

「鞘上絹枝、です。よろしくお願いします」

絹枝は微笑みながらゆっくりと、しかし深々と頭を下げる。長く綺麗な黒髪が前に落ちた。頭を上げ、それを掻き上げる仕草が妙に艶っぽい。雀ヶ森が朔羅の隣の席に着くよう促すと、一步一步、独特のリズムで歩いて着席する。朔羅はこのリズムにどこか違和感を覚えたが、それが何かは分からなかった。

隣の席に座った絹枝へ、朔羅は微笑みかける。

「私、風代朔羅。よろしくね、鞘上さん」

「……風代、さん。うん、よろしくね」

声をかけられた絹枝は一瞬きよんとしていたが、すぐに微笑み

を返してくれた。おっとりした子だな、というのが朔羅が抱いた第一印象だった。

転校生の紹介も終え、雀ヶ森は淡々とホームルームを始める。出席の確認を終え、連絡事項を済ませると肅々とホームルームを終えた。黒板に刻まれた絹枝直筆のサインを指して、「授業が始まるまでに消しておいてくれ」とだけ言い残して教室から去って行った。

ホームルームが終わるや否や、朔羅は立ち上がって絹枝の隣に立つ。

「鞘上さん！」

朔羅の声に教室中が色めき立つ。「よっ、特攻隊長」などという声上がる辺り、このクラスにおける朔羅の立ち位置は既に確立していた。

ちなみに朔羅は立ち上がっているにも関わらず、座っている絹枝とは丁度同じくらいの高さで視線が合うようになっていた。見上げる必要も、見下ろす必要もなく横を向いた絹枝は、どこか見惚れるようにぼう、と朔羅を見つめていた。

朔羅はビシツと手を上げて尋ねる。

「絹枝ちゃんって呼んでいいですか！」

「あ、私も」と他の生徒たちも随時それに続いていく。この勢いに呆気にとられていた絹枝だったが、やがてこくと頷いた。そうしてももの数秒で、絹枝の呼び方は「絹枝ちゃん」で定着していった。

「私の事も朔羅って呼んでねっ！」

やがて絹枝の周囲には朔羅を筆頭に女生徒たちの輪が出来上がる。絹枝への質問攻めは一時間目の英語を担当する教師が現れるまで続いた。

「ほら、転校生と仲良くするのもいいけど、休み時間にしてくれよ」「はい！」

英語教師の声に、輪に加わっていた生徒たちは順次自分の席へ戻っていく。

朔羅の前の席であるなぎさが絹枝を振り返り、声をかける。

「ごめんなさいね、うるさい子で。私、穂叢なぎさ。この子とは一緒の家で暮らしてるの。よろしく」

「ううん、大丈夫。すごくかわいいなって思ったから。よろしくね、穂叢、さん」

3 .

放課後となり、生徒会の会議を終えた朔羅はなぎさと共に帰路に就いていた。本来なら絹枝とも一緒したかったところなのだが、彼女は「引越しの片付けが終わってないから」と言って先に帰ってしまった。残念だが、そういう事情なら仕方ない。

朔羅たちの学校はゆるやかな坂の上にある。坂の下まで降りてこれば、朝に水輝と会った交差点まで辿り着く。水輝とはそこで分かれ、朔羅たちは『螺旋の環』へと向かって真つすぐに帰っていく。

「桜、散っちゃうねえ」

「そうね。このままだと、四月が終わる前になくなるかもしれないわね」

四月の空に桜の花びらが舞う。短い桜の季節が終われば、春と夏の境目が訪れる。

「あと、一年かあ」

朔羅は眩しそうに桜吹雪を見つめた。あと一年で高校生活も終わりを迎える。朔羅もなぎさも進学を決めていたが、この街からは離れる事になる。卒業すればこれまで一緒だったクラスメイトたちと会える機会はほぼなくなるだろう。

だが朔羅は感傷に浸るわけでもなく、なぎさに笑顔を向けた。

「それじゃあ、めいっぱい楽しまないとねっ」

やがて周囲のベッドタウンから切り離されたかのような佇まいを見せるアンティークショップの看板が見える。『螺旋の環』の入口を潜り、朔羅たちは帰宅した。

「お帰り、二人とも」

二人の姿を確認して声をかけてきたのは、オーナーである柊蘭だ。眼鏡の奥のどこかミステリアスな美貌に静かな微笑が浮かぶ。

「そうだ、よかつたら彼女を手伝ってあげてくれないかな。引越しの片付けをしているんだけど、どうやら色々と余計なものを渡されてきたようなんだ」

引越し。一体何の話だろうか。腑に落ちないながらも何か引かかるものを感じた二人は、二階への階段を上りだした。『螺旋の環』の二階は居住スペースだ。手前に個人部屋が並び、一番奥にリビングやキッチンといった共有スペースがある。

朔羅となぎさの部屋は一番手前側にあつた。廊下を挟んで向かいになるように配置されている。ここに暮らしているのは今は朔羅、なぎさ、蘭の三人のだが元々宿舎としての役割も兼ねていた建物であつたために部屋の数は多い。

蘭の部屋は共有スペースに最も近い奥の部屋だ。そのため朔羅の隣部屋はもちろん空き部屋であるはずなのだが、今日に限ってはそのドアが開かれ中から物音がする。

「あのー、よかつたらお手伝い……」

朔羅が恐る恐る部屋を覗いてみる。すると彼女は中にいた人物と目を合わせて固まってしまった。なぎさも顔を出す。

「やつぱり、あなただったのね鞘上さん」

「朔羅、ちゃんに穂叢、さん」

絹枝は朔羅となぎさの登場に心底驚いた様子だつた。

誰かが階段を上ってくる音がする。振り返れば蘭がこちらへやってきていた。啞然としている朔羅たちを見て、彼女は呑気にああと得心する。

「そうか、君たちには言っていなかったね。今日から絹枝君もこの『螺旋の環』で暮らす仲間だよ。実は彼女は私たちの師匠、赤羽サツキの娘さんでね。師匠の頼みでここで預かることになったんだ」  
「え、む、娘つて、師匠に子供さんがいたんですか!？」

「まあ、そう驚かなくてもいいんじゃないかな。八十を過ぎてもあの身体なんだ。何をしているかは推して知るべし、といったところだよ」

そう言われれば確かに、と朔羅たちは納得する。『螺旋の環』前オナーである赤羽サツキは八十代を自称しているもののその容姿、身体付きは二十代後半から三十代前半辺りで保たれている。明らかに異常な若さだったが、その理由を知る彼女たちは絹枝という確たる存在を前に納得せざるを得ないのだ。

「え、えと」

朔羅は絹枝に向き直る。

「改めて、よろしくね？」

目を見開いて呆然としていた絹枝だったが、その表情はやがて柔和な微笑みに変わる。

「うん、よろしくね」

朔羅となぎさは自室に鞆を置いて、絹枝の手伝いを始めた。ベッドに机、布団に鏡にタンス。妙に多くの家財道具が室内にひしめいていたが、どうやら全て彼女の母たるサツキから渡されたものであるらしい。あれもこれもと必要そうだと思われたものを手当たり次第与えられたのだろう。明らかに部屋の容量を大きく超えていた。

閉店作業を終えた蘭も交え、片付けは部屋に置く物と置かないものの整理へと入っていた。使わないものは空いている部屋を物置代わりに、そちらへ仕舞う事となった。サツキには悪いが、よく考えずにばいばい物を渡したあなたが悪い。以外に親バカなのかなと朔羅は思うのだった。

「お疲れ様、三人とも」

労うとともに、蘭は全員へ紅茶を振る舞った。リビングのテーブルに着いて息を吐く朔羅たちの前に、紅茶の深い香りが漂う。蘭は自身の紅茶に真っ先にミルクを注いだ。イギリス人の祖母を持つクオーターであるところの蘭は、祖母の影響か紅茶は確実にミルクテイー一択だ。

「蘭さん、結構体力あるんですね」

蘭の様子を見て、なぎさが言った。

「そうでもないよ。私は殆ど見ていただけだったからね」

ぐったりとはいかないまでも本当に疲れた様子の高校生三人に対して、蘭は優雅に紅茶を口にしながらケロリとしていた。朔羅からしてみれば別にそんな事はなかった気がするのだが。この人はこの人で結構謎だ。

「では、一休みしたら夕食にしよう。今日は絹枝君の入居祝いだからね、いつもより豪華にしようか」

『螺旋の環』では蘭が食卓を切り盛りしている。といっても、彼女自身はあまり料理が得意という訳ではないのだが。

「あれ、そういえばみゆうは今日はいないんですか？」

朔羅の問いに、蘭は今更気が付いたかのようにああと声を出す。

「今日は朝に出て行った切りだね。まあ、彼は気紛れだから。またいつか戻ってくるよ」

呑気に嘯いて、呑み干したカップを手に蘭はキッチンへ向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5097z/>

---

魔法使いになりたいから

2011年12月18日10時49分発行